

コミュニケーションを考える

—心理臨床活動と日常場面から—

望月まさえ

はじめに

「理解できた!」「納得した!」「腑に落ちた…」、「あるいは「わからない」「理解できない」。

何らかのメッセージを発する人の言わんとしていることを掴もうとする作業を、私たちはおのずとしている。あるいは何かを読んでいるときや、講演、マスメディア、インターネットといった一方向の情報を得ようとしているときにもそうである。

相手の言おうとしていることがうまく掴みとることができなければ、こちらには何かしらのジレンマが生じてくる。その一方で相手の言わんとしていることがスッと自分の中に入ってくると、「腑に落ちた」と感じるができる。

これは、人間にとって当たり前の感覚であると思われるが、あまりに自明のことでありすぎて、このことが私たちにはあまり意識されないままとなっていることが多いのではないだろうか。

われわれが他者とのコミュニケーションをはかるために、

まず相手の述べている内容を理解しようとすることから始めなくてはならない。こちらが言いたいことを相手に伝えるだけでは、一方通行となってしまう。また、相手の言っていることを全て受け入れることに終始することも同様である。コミュニケーションをはかるというものは即ち、こちらが相手に伝えたいことと相手はこちらに伝えたいことの相互作用である。

しかし近年、デイスコミュニケーションという言葉を増やす機会が増えた。原語の意味合いでいえば dis-communication ないし dys-communication^① となるのでコミュニケーションが成立していない状態とでもいうのだろうか。まだ新しい概念であるため、定義が確立されていないが、私が援用したいのは山本登志哉^②と、高木光太郎の「異なるコミュニケーションのルールをもつものが、それとは気づかずに会話を続けることによって混乱や誤解が蓄積されていく」^③、コミュニケーションの齟齬という意味でのデイスコミュニケーションである。

本論では、私が心理臨床活動をしてきた中で見られたことを例に挙げつつ、コミュニケーションをはかること、デイスコミュニケーションが起ることから生ずることについて、いくつかの観点から論じ、考察を深めたいと考えている。

また、本論の掲載される紀要は、必ずしも特定分野の専門家のみが目にするというわけではない。インターネットを通じて広く一般の方々の目にもふれる機会があることを踏まえた上で、可能な限り平易な言葉で論じていきたい。

心と身体をつながり

「腑に落ちる」とはよく言ったものである。「腑」には内蔵、はらわたの意味があり、「五臓六腑に染みわたる」という表現をすることで、「身体のすみずみまで味わう」というような意味合いを表現することが可能となる。また、「腑」にはもう一つの意味がある。心、性根がそれである。「腑に落ちる」というと「身体のすみずみで理解できる」というような感覚を表現できるように思われる。

私はこれまで、相手の言わんとしていることが「何となく」よりも、もっと確かな感覚で自分の中に入ってきたときに、身体のもやもやした感覚がフッと軽くなる体験を何度となくしてきた。もちろん、多くの場合は、相手の言っている意味が「何となく」でしかつかめずに、ジレンマが生じ、身体にすつきりしない感覚を残したままになってしまうこととなるが。

臨床心理士になろうと大学院に入学し、それから臨床経験を積むための研修を行い始めてから、こうした気持ちの動きが身体感覚にむすびつくということに気づかされる場面が多々あった。というよりも、思い返せばずっと昔からこうした感覚をもっていた。ところが、大学院に入学する以前に社会の一員として働いてきたなかで、こうした感覚がむしろ周囲への不適応という負の意味をもってしまったために、身体感覚を麻痺させるようにして職場に適応してきたのである。心と身体を切り離すこととなっていたために忘れてしまっていた感覚を、大学院に入学して以降少しずつ再認識し、

心理臨床という現場ではむしろ、それをつなげていくことが肯定的意味をもつことであると痛感していくことで、この身体感覚が自然なものとなったとも言える。

このような身体感覚は、個人的なものであると同時に人間すべてに共通の感覚だと考える。しかしながら、この感覚に気づくことを状況的に許されている人びとは、現代社会においてはあまり多くはないのではないだろうか。

共感的理解

臨床心理士になるためのトレーニングを始めてから、私はさまざまな人たちと出逢ってきた。医療現場や教育現場でのカウンセリングという形や、電話相談や相談窓口での援助活動という形態であったりと、その関わり方もさまざまである。その対象となるのは、何らかの悩みを抱えている人はもちろんのこと、何に悩んでいるのかわからないが、心のどこかで援助・フォローアップを必要としている人もいる。さまざまな現場での援助者と援助対象者との関わりの中で、相手の気持ちを共感的に理解することはカウンセリングや心理療法を行う中で基本的態度の一つとされる。

共感的理解とは、クライエント中心療法の始祖であるロジャースが提唱した概念であり、「あたかもその人のように（*as if*）という状態を失わず（いわば来談者の感情に巻き込まれることなく）、来談者の私的世界を自分の身に感じる状態」をいい、「来談者の感情をよく理解する、来談者の表現の意味するとともに疑いを挟まない、来談者の気分と真意を正確に

感知する、治療者の声の調子が来談者と感情を分かち合っていることを伝える関係とも理解される。」⁴⁾

一口に共感的理解と言ってしまうといかにも簡単なようだが、やってみると実は非常に難しいと痛感させられる。よく、援助機関の職員の方に「ふんふん、って聞いているだけのよう思うけどねえ。でも、何か秘密があるんだらうけど、どう違うんでしょうね」と言われることがある。この気持ちは非常によく理解できる。というのも、私が大学生の時に授業の中で、『グロリアと三人のセラピスト』⁵⁾というビデオの中に出てくるロジャースの面接の仕方を見たときに全く同じことを感じたことがあるからである。確かにただ外側から見ていると「ふんふん」と聞いているだけのよう思えてくる。実際に共感的理解をしたり、されたりする体験を意識的に行ったことのない人から見れば、それでどうして良くなっていくのかと、何か繋がらない感覚が起こるのであろう。もちろん、共感的理解のみを一部始終心理臨床家が行っているわけではなく、他の重要な要素は数多くあるのだが、ともかくも、この共感的理解という態度から生まれることはとても大きなことである。

日常的なコミュニケーションの中の事例

ここでは、日常的に起こってくるコミュニケーションの例を、私の感想も交えながら紹介していく。

まず、挙げるのは、私がスクールカウンセラー（以下、S Cとする）として働いている、ある中学校での出来事である。

「ケース1」

ある男性教諭が、保護者から「うちの子が同級生からこんなひどいことをされたんです！」との訴えを受けた。よくよく話を聞いてみると、同級生からかわれたり、少しこづかれたという内容であった。話の内容は理解できたものの、それを男性教諭に伝えることで、保護者がいったい何を求めているのかということが掴みとることができなかった。そこで彼は「それで、どうしたいとお考えですか？」と尋ね、何をこちらに要求しての訴えなのかをハッキリさせようとした。すると、保護者は「いや、別に……」と答えた。

こういった話をS Cである私にしてくれた後で、「こういうパターンが最近非常に多いんですよ」と男性教諭は言った。「最近の親は訴えるだけ訴えて、どうして欲しいかを言わないし、聞いても答えられない人が多い」ということだった。

雑談の中の一コマだったので、「へえ、そうなんですわね」とこちらが答えたまま、別の話題になってしまったのだが、後からこのことを思い返しても、どこかしっくりこないという感覚がいつまでも残った。

このことから、私が修士二年生の時の、スーパーヴァイザーとのやり取りを思い出した。私がケース報告をし、「で、今のことについてどう感じたの？」と尋ねられたのであるが、

私は、一瞬きよとんとしてしまった。そのあと、自分が感じたことを言おうと思うがうまく言葉にならず、しどろもどろに答えていたら、「つまり、〇〇ということを感じたんじゃないの?」と言われ、ハッとしたことがあった。

私が報告していたのはケースの内容のみであり、そこには考えや感じたことなどの個人的なものは話していなかったことに気づかされたのである。

先の教師との話について同様の視点から見ると、似通う部分があるのではないだろうか。つまり、その保護者は、教師にどうこうして欲しいという具体的なものがあつたというよりも、「これこれこういうことがあつたんです。どうしましよう…。私はどう受け止めたらいいのでしょうか?」という戸惑いを伝えたかつたのではないだろうか。「先生どう思いますか?」と、まずは教師の考えや意見を聞くことで、その中から自分の考えを見出し、それから子どもから訴えられたこと感じた戸惑いを伝えたかつたという見方をしてみることもできるのではないだろうか、ということである。

私がケースを報告をしたことで、自分の気持ちや考えをスーパードクターに伝えていたような気になつていたが、「あなたの感じたこと」を問われ、ハッと気づいたように、この保護者も「こういうことがあつたんです」と伝えることにいろいろな感情を含めて男性教諭に伝えていたと解釈してみよう。すると、教師からの「あなたは私に何を求めているんですか?」という問いに対し、「今言つたじゃないですか」という怒りの気持ちになつたかもしれないし、「どうして伝わら

ないだろうか?」と不満な気持ちになつたかもしれない。そして、こうした気持ちから伝えても無駄だと思い、「いえ、別に…」と答えるにとどめたのかもかもしれない。あるいは、保護者自身が何を訴えたいのか?と聞かれると、「さて、自分が何を訴えたいのか?分らない(自覚がない)」と思い、「いえ、別に…」という言葉しか出てこなかつたという風にも受け取ることができる。

もちろん、これは私の想像である。話題に挙がつた保護者と直接会つたことも話をしたこともなく、男性教諭からの間接的な話題であるため、専門家としての所感という意味では、根拠に薄いところは多分にある。しかし、われわれ心理臨床家は、話をする人の言葉を受けて、さまざまな観点から多角的に物事をとらえることが要求される。そのため、こうした、ある種枠にしばられない想像力が必要なのであるということをつけ加えておく。

次に挙げるのは、とある高校三年生の男子A君から雑談の中で意見を求められた話である。

「ケース2」

彼と同じクラスのB君とC君が、もう二度と口をききたくない、仲違いをして一年になる。それまで二人はとても仲が良かった。

一年前の修学旅行の時に、B君は好きな同級生の女の子とお土産交換の約束をし、待ち合わせ場所に行こうと

した。しかし、実はC君も同じ女の子が好きであるのを知っていたため、一人だけ抜け駆けは悪いなと思ひ、C君に約束の場所に一緒に行かないかと誘った。C君は、とりあえず一緒に行ったものの、渡すお土産もなかったため、手持ち無沙汰な時間を過ごした。B君と女の子のお土産交換は終わり、B君とC君は連れだつて自分の部屋に戻つたのだが、その時にC君はB君に「なあ、今日渡したお土産が足りないから、明日お土産買うの付き合つてくれないか？」と言つた。そこで、C君はキレてしまい、こいつとはもう口をきかない！と決め、修学旅行から帰つてからB君を無視し始めた。

C君はその話を周りの友達にして、「あいつ、ふざけてんだろ？ チョー最悪だよ！」と言つて、みんながB君を嫌いになるように仕向けた。しかし、B君にはC君が突然怒り始めたように感じており、C君に「多分俺が何か悪いことをしたんだと思う。ゴメン。謝るよ。でも、俺が何したのか、申し訳ないけど、思い当たるフシがないんだ。だから、教えてくれ。とにかくゴメン！」と謝つた。しかし、C君はこの言葉を聞き、さらに怒りを覚え、「お前のことは、もう知らねえ。二度と口をきかない」と言つた。その言葉を受け、B君は、「話の通じないヤツだな、俺だつて知らねえよ！」と思ひ、それから一年もの間全く口をきいていない。

よくある話と言つてしまえばそれまでかもしれないが、こ

れはなかなか興味深い話だと思われる。

意見を求めてきたA君が、最初に私に聞いてきたことは「仲違いをしている二人がいるんだけど、仲直りさせなくてもいいと思うか？」ということであつた。そこで、どう思うのか尋ねてみると、それぞれから話を聞いてもそれぞれに仲直りしたくないと言うから、ほおつておこうと思ふという。「それよりも、この話を聞いてどう思うか？」と聞かれたので、私は素直な感想を伝えてみた。大まかに言うと次の五点である。

- ① B君がお土産を渡しに行く時に、C君を誘つたのはまづかつたと思う。これでC君のプライドはかなり傷ついたと思う。
- ② C君が腹を立てた気持ちは分かるが、B君を嫌いになるよう周囲を巻き込んだことは、あまりいいことではないと思ふ。けれど、C君はそれくらいの怒りを持つたんだと思ふ。
- ③ B君が謝ろうとしたのに、B君が自分のしたことに基づいていなかったことにC君は相当頭にきたんだろうと思ふ。そういう意味で、C君が口もききたくないという気持ちはわかる。
- ④ C君の言葉を聞いて、事情も話してくれないで一方的に怒っているのはB君の立場に立てば、そのように思ふのも無理はない。
- ⑤ 全体として、相手は自分の気持ちを分かってくれるはずだろうに、そうならなかつたことにいらだち、仲違いをする結果となつてしまつたことは残念だと思ふ。

私は、出来るだけどちらの立場にも立って答えたのであるが、これを聞いたA君は、自分も全くその通りだと思ふ、と言った上で、自分の言葉で自分の気持ちを丁寧に私に話してくれた。そして、どっちもどっちであり、正直に言つて、好きにしたらいいと思うが、こんなことで仲違いしてしまうのも残念だとも話してくれた。また、私の意見を聞いて、自分が感じていたもやもやとした気持ちがスッキリしたとも彼は言つた。

実は、こういった話をする前にA君が私に最初にした問いかけは「人と付き合うときには広く浅くの方がいいのかなあ？」ということであつた。あまりに唐突な質問であつたため、「うーん……どうなんだろう……」と考え込んでみると、彼が先の話をもツポツとしたのである。彼からしてみれば、それぞれに「同じクラスの友達」であり、同じ距離感での友達であつた。その二人が以前は仲が良かったのに、一つの出来事で、こんなにも仲違いしてしまうことが不思議であつたのである。彼自身のこれまでの経験とこの出来事を踏まえて、私に先ほどの質問をしてきたのである。

A君は自分の考えを言葉にするのがあまり得意ではないので、私が自分の意見を伝えることで、そこから自分の考えのヒントを得て、自分なりの言葉で私に伝えることができたようである。また、私が「B君もC君も、相手が分かってくれるはずだと思つていたから、裏切られたような気がしたんじゃないかな」と言つたことでハツとしたという。「俺の周りの友達には、そういう考え方をする人がいないし、気づきも

しなかつたかもしれないことに気づけてよかつた。ありがと」とお礼まで言つてくれたのである。「どういたしまして」と答えた後、私は、「周りにそういうことを質問できそうな年上の人はいないの？」と聞いてみた。さすがに高校生ともなると、親や先生に相談することもしづらくなつてくるだろうが、それ以外の少し年上の人との出会いの機会がないか、気になつたからである。すると、「いないし、聞いても多分ちゃんと答えてくれないと思う。諦めているし」と彼は答えた。

コミュニケーションの難しさ

先に述べた二つのケースに共通することの一つに、コミュニケーションが実はいかに難しいかということが挙げられる。広辞苑によれば、コミュニケーションとは「社会生活を営む人間の間に行為される知覚・感情・思考の伝達」であり、「言語・文字その他視覚・聴覚に訴える各種のものを媒介とする」ものである⁶⁾。非言語的(ノンヴァーバル)な情報も含ませながら、このようにさまざまな情報をお互いに伝えあい、やり取りをすることでコミュニケーションは成り立っていくのである。しかしながら、私たちはこういつたやり取りをそれほど意識せずに行つてゐる。相手の言わんとしていることを一〇〇%といかないまでも、かなり高い割合で受け取るためには、相当の集中力を必要とする。実際われわれ心理臨床家は、援助対象者と面接や電話での受け答えの中で、相手の状況を常に関係性を保ちながら、客観的に観察する視点を同時に持つということを行つてゐる。面接のように相手が見える

場合は、しぐさや表情、顔色、服装などを見ているし、電話相談の場合は、声のみの情報となるものの声のトーンや間といった非言語的な情報を頼りに相手の様子を探っているのである。相手の話の内容をじっくり聴くという姿勢も必要となってくるため、なかなかこれは大変なことである。

「ケース1」についてであるが、保護者と男性教諭との間のコミュニケーションについては先に述べたのでここでは割愛し、男性教諭と私の間のコミュニケーションについて考えてみたいと思う。

相談にきた保護者の伝えたいことが、あまりにも漠然としてつづもさまざまな感情が裏に潜んだ訴えであったため、男性教諭は、保護者が本当に伝えたいことを掴みきれずに、釈然としないものを感じたと考えられる。また、男性教諭のこれまでの経験から、最近関わっている多くの保護者たちに共通することを見出し、「最近こういうパターンの訴えをする親が多い」と結論づけるかのように発言するに至ったと想像する。私はこの男性教諭の言葉から、彼の何とも言えない怒りの混じった不全感を感じ取った。それが、具体的に何に対する怒りなのかを明確にすることのないままにその話を終えてしまったが、彼が私に伝えたかったことは、彼が最近関わる保護者の傾向がこうなのだとしたことだけではなく、「このパターンは心理学的にどうなんでしょうか？ 全国的にそうなのでしょうか？」「こういう保護者に対しては、どう対応したらいいんでしょうかね？」と、専門家としての意見を聞きたいという意味を含んでいたのかもしれないし、あるいは単に

「もう、腹が立ちますよ！」という怒りだけだったのかもしれない。

その言葉に含まれていた意味を、その場でこれらの想像をもって男性教諭に返すことができていたら、もう少し詳しいことがわかったのかもしれないが、残念ながら時間と状況の都合上展開することはできなかった。これが、面接場面という状況であれば、男性教諭の気持ちに添いながら私が言葉を返すことで男性教諭の中に起こっていたであろうデイスコミュニケーションは多少解消されていたのかもしれないし、保護者との間で起こっていたかもしれないデイスコミュニケーションについて、もう少し詳しい状況が把握できていたかもしれない。

このように、雑談の一コマで相手に何がしかのことを伝えたくもりになって満足していたら、実はあまりうまく伝わっておらず、「あいつは物のわからんやつだ！」と誤解が生じていることに後から気づかされたり、お互いの関係がぎくしゃくしてしまふ、あるいは相手が心を閉ざす一端となってしまうことにつながることもありえるのである。

「ケース2」ではまさに、そのようなデイスコミュニケーションが起こっている状態である。例に出てきたB君、C君ともに「互いに理解し合っている」という前提で話をすすめ、B君はC君の事を思っていたこと（女の子にお土産を渡すのに誘う）であったようであるが、それはC君にとっては、逆にブランドを傷つけられる体験となってしまった。また、ここでC君は「お前、そういうの、ちよっと違うんじゃないの？」と怒

り混じりの言葉でB君に伝えることができたら、B君は自分の行動を反省することができていたのではないかと思われる。しかし、C君は別のやり方（友達を巻き込んでB君を完全な悪者にする）で気持ちを表現することとなってしまった。率直な表現ではなかったために、B君は何かわからないなりに自分に非があるとして、C君に謝るものの、C君はB君が自分のしたことに気づいていなかったことに、さらに腹立たしさを感じ、B君をシャットアウトしてしまっただけである。B君にしてもC君にしても、お互いがお互いを理解し合っている親友だと思っていたようであるが、実はこういう行き違いをその都度ぶつけ合い、自分の考えを相手に伝える作業をしなければ、コミュニケーションは強化されない。そういった意味において、かりそめのコミュニケーションをはかっていたに過ぎないのかもしれないのである。

しかし、こういった一見するとコミュニケーションがはかれているように見えるという状況は、実はよくあることである。

見目のコミュニケーション

コミュニケーションは、お互いに会話が弾んでいればコミュニケーションが取れているように見えてくるから不思議である。

「ケース2」を語ってくれた高校生A君には、B君とC君がとてども仲良さそうに見えていた。しかし、本当のところは相手に言いたいことを我慢して付き合っていた可能性も考えられる。それは、例えば「こいつと仲が悪くなったら、一緒にいる

やつがいなくなってしまう」という不安な気持ちや打算からかもしれないし、「まあそれほど、取り立てていうこともないか」と気持ちを飲み込んでいるということもあるであろう。あるいは、本音を言ってしまったらきつく聞こえて、「相手を傷つけるんじゃないか」「怒られるんじゃないか」という互いに傷つけあうことを恐れる気持ちからかもしれない。

最近では携帯電話のメールが浸透し、小学生からお年寄りまでメールを使う機会が増えている。また、ビジネスシーンでもメールでのやり取りは欠かせないものとなっている。さまざま相手の元に着いてしまうため、できるだけすぐに返信をしないと相手が不快に思ったり、ひどい場合には怒りが高じていじめに発展するケースがあることをメディアで取り上げられるほどである。

果たしてこれが、やり取りをしているというだけでコミュニケーションと言えるのだろうか、と問うた場合、いったいどれほどの人が「コミュニケーションが取れている」と答えるのであろうか。一応は取れているという答えが出そうだ。では、「分かりあえていると思いますか？」と聞いてみよう。「本当に」分かりあえていると思うのかと自身の心と向き合ってみたときに、心の底からそう思える人はそれほど多くはないのではなからうか。このように、もろく危ういコミュニケーションが強化されるのごとく、メールを彩る絵文字や顔文字は増え、それを後押しするように顔文字・絵文字の使用の方マニユアルが生み出され、さらに中身の見えづらい一方通行のコミュニケーションが増えていると思われる。

本音の気づきづらさからくる語りづらさ

われわれ心理臨床家は、危機的介入や自殺企図を訴えるような緊急性の高い場合を除いて、概ねクライエントや被援助者の話にじっくり耳を傾けることができる。また、先に述べてきたような姿勢や視点をもつことが要求されるため、むしろ急ぎすぎずじっくりと関わるのが可能である。そのため、クライエントらが今まで誰にも言ったことがなく、今まで気づくことすらできなかった気持ちに気づくときに巡りあう機会にめぐまれる。そうして、われわれは、彼らの話にじっくり耳を傾けることが非常に有益であることに気づき、その考え方を強めている。とはいえ、われわれがスーパーヴィジョンを受けることや、研修会・学会等への参加を通じて、振り返りの機会が比較的用意されていたとしても、それ以外の時間を、自身の体験を振り返る間もないほどに、日々の臨床活動に追われている臨床家たちがいることも現状であるが。

日常的なコミュニケーションにおいてはなおさらで、これまで取りあげてきたケースでも少し述べたが、じっくり考える間もないほどルーチンワークに追われていたり、悩みを相談したくとも「聞いてもらったら悪いのではないか」とすら思えてくるようなせわしなさを周囲が非言語的に表わしていたりすることを、私たちは日々感じていることであろう。また、「ケース2」のように、自身にじっくり考えるだけの経験値がない、周囲からの助言が望めない場合もある。また、どちらにも通底すると考える、本音を語ることへの怖れを漠然と抱く場合もある。

また、五〇代のある女性教諭から聞いた言葉が私の頭をよぎる。「私たちの親世代は戦争を経験してきたから、価値観そのものが一八〇度ひっくり返ってしまつてね。そのことがいつもどこかでつきまとつて、自分の価値観に自信がもてなくなつてしまつたのよ。だから、親に何もこれといった価値観を教わらずに来たところがあるから、一体これいいのか？ という不安が常につきまとうのよ」。価値観の問題もまた、さまざまな要素を含むため、ここでは一般論にとどめたいと思うが、次のようなことを私は考える。戦争に限らず、高度経済成長の影響を受けてから二〇〇七年現在に至るまでに、「価値観」というものを改めて考えさせられる出来事が数多くある。何かを言えばそれに対して反論が必ず飛び出てきそうな環境にあるなかで、私たちは自分の考えにある程度の強さをもたせられるよう育てることが可能となる時間を果たしてもていけるのだろうか。

おわりに

本稿を論ずるなかで、私は以前に書いた事例論文にいたいたコメントを思い出した⁷⁾。母親からの一方的な関わり方に耐えてきたクライエントとの関わりを通じて、セラピストである私とクライエントの関わり方が双方向になってきているように感じるとコメントをいただいたのである。他者からの一方的に受けざるを得ないクライエントが「一方的な関わり」を「信頼できる、重要な他者」に抱えられ、「本音を言っても嫌われないんだ」という意識に変えて「双方向的な

関わり」へと変えていく作業。これは、クライエントに限らず、私たちが日々のなかで少しずつ積み重ねていく必要のある作業ではないかと、今強く感じる。

註

- (1) 野村一夫「社会学感覚 10 コミュニケーション論 / ディスコミュニケーション論」
<http://www.socius.jp/lec/10.html>、二〇〇五年六月一八日。
 この中で「ディスコミュニケーション」の英訳は dys-communication と紹介されている。
- (2) 高木光太郎『証言の心理学』中央公論新書、二〇〇六年、一一六頁。
- (3) 山本登志哉「文化間対立という現実へ——構造的ディスコミュニケーション分析」『現代のエスプリ』四四九、至文堂、二〇〇四年、一五八—一六七頁。
- (4) 林潔「共感的理解」、中島義明他編『心理学辞典』有斐閣、一九九九年、一八三頁。
- (5) 『グロリアと三人のセラピスト 日本語版』監修・翻訳：佐治守夫、都留春男、平木典子、企画・制作：日本・精神技術研究所。
- これは、心理学の面接法の授業の中で用いられることが多いものであるが、求談者中心療法のロジャース、ゲシュタルト療法のパールズ、論理療法のエリスという三人のセラピストたちが三〇歳のグロリアという女性クライエントをそれぞれ

れのアプローチから面接していく様子をビデオに収めたものである。

(6) 新村出編『広辞苑第五版』岩波書店、一九九八年、五二〇頁。

(7) 武藤百合「望月論文に対するコメント——“一方向的”な関わりから“双方向的”な関わりへ——」『甲南大学心理臨床カウンセリングルーム紀要 甲南大学心理臨床研究』十二、二〇〇四年、七八—八〇頁。

(もちづき まつえ・臨床心理学)